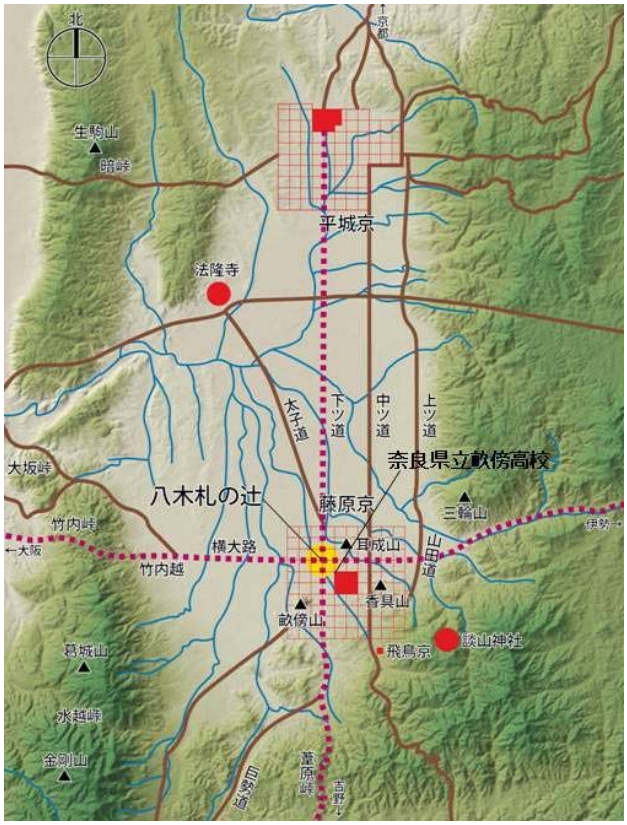
奈良県立畝傍高等学校

国の登録有形文化財一覧表

名称	構造、形式及び大きさ	建設年代
本館北館	RC 造 3 階建、本瓦葺、建築面積 983.4 ㎡	昭和 8 年
本館南館	同上 755.1 ㎡	昭和 8 年
本館渡廊下	同上 168.1 ㎡	昭和 8 年
第三倉庫	木造平屋建、桟瓦葺、建築面積 29.7 ㎡	昭和 8 年

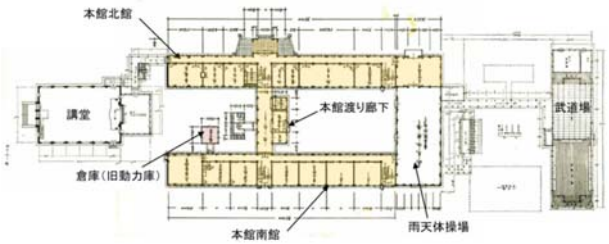
詳しくは、国指定文化財等データベース https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.html より、検索の上ご覧ください。



案内図（奈良盆地の古道と都城）

立地

奈良県立畝傍高等学校は奈良県中南部の中核都市・橿原市に所在し、同市の中心地である近畿日本鉄道大和八木駅から東に 500m ほど離れた場所に位置している。当地は藤原宮にほど近く、校地の北辺近傍が藤原京横大路にあたり、南面は旧初瀬街道である国道 165 号線に面している。また、畝傍山・香具山・耳成山の大和三山が指呼の間にあるなど、歴史的な環境に恵まれた地である。



昭和 8 年竣工時の建物配置（本館、倉庫以外は現存しない）↑北

学校の沿革

当校は、明治 29 年(1896)3 月 13 日付奈良県告示第 101 号をもって、奈良県尋常中学校畝傍分校として開校し、県下では五條分校(現奈良県立五條高等学校)と共に、郡山中学校(現奈良県立郡山高等学校)に次ぐ古い歴史を持つ。開校当初は晩成尋常高等小学校(現橿原市立晩成小学校、橿原市小房町所在)の一部を仮校舎としていたが、翌明治 30 年(1897)4 月、八木町大字八木(現橿原市八木町 1 丁目、近畿日本鉄道八木西口駅東側)に新校舎を建設して移転し、明治 32 年(1899)4 月 1 日付奈良県告示第 66 号をもって奈良県畝傍中学校として独立、明治 34 年(1901)には奈良県立畝傍中学校と改称した。

北館塔屋と車寄せ・玄関

その後、校舎老朽化に伴い昭和 8 年(1933)に現在地である橿原市八木町 3 丁目に移転したが、昭和 20 年(1945)に海軍経理学校へ校舎を貸与したため、再び晩成国民学校に移転、同年 8 月終戦に伴い施設の返還を受け現在地に戻った。戦後は学制改革により昭和 23 年(1948)4 月 1 日付奈良県告示第 77 号をもって高等学校に昇格し、奈良県立畝傍高等学校となり現在に至っている。

『改築落成記念』表紙

『改築落成記念』絵葉書部分

現校舎の沿革

当校の敷地は東西約 260m、南北約 220mで、敷地西面やや南寄りに正門を開き、正門から東に中央通路を延ばして校地を南北にほぼ 2 分し、南側に校舎等の施設を配し、北側は敷地をやや低くして運動場とする。校舎は中央西寄りに北館、南館、渡り廊下からなる本館を配し、北館、南館の間に第一・第二倉庫、第三倉庫を配す。本館西側には文化創造館、第一、第二史料館が並び、本館東側には、北館に並んで特別教室棟、南館に並んで新南館が配され、この間に小体育館を配している。これよりさらに西には部室、体育研究室を配し、西端にプール、格技場を設ける。中央通路、運動場間の段差には階段を設け、ほぼ中央に本館玄関と軸線を揃えて後壁付きの朝礼台を設ける。運動場は東端に体育館、弓道場を配し、弓道場北には同窓会館を配している。敷地西面は水路を挟んで道路に面し、正門に連続して切石積上に鉄筋コンクリート製の柵を設けている。

南館屋上から北館越しに見る耳成山

本館南館南面

前述の通り、当校は昭和 8 年(1933)に現在地に移転したが、現在地においての校舎建設は『畝高七十年史』(昭和 42 年(1967))などによれば、昭和 5 年(1930)の敷地造成に始まり、昭和 6 年(1931)9 月より第一期工事として本館、雨天体操場、職員便

所、動力室などの新築工事に着手、翌昭和 7 年(1932)9 月に竣工し、電灯設備未完工ながらも昭和 8 年(1933)1 月から授業が開始されている。第二期工事は同年 3 月着手で、講堂、武道場、銃器庫、物置、生徒便所などを建設し、同年 10 月に竣工して全館が完成し、10 月 27 日に落成式が行われた。

宝形造、相輪を載せた北館塔屋の屋根

設計者については『改築落成記念』(昭和 8 年(1933))に、「設計顧問　工学博士　笠原敏郎／設計　技師　寺師通尚／技手　岩﨑平太郎」とある。笠原敏郎は当時、関東大震災後の東京の都市計画に携わり、帝都復興院建築部長を務めており、寺師通尚は、一時奈良県技師として赴任していたが、設計の実務は、岩﨑平太郎が取り仕切ったとされている。岩﨑は奈良県吉野郡下市町に生まれ、吉野実業学校(現奈良県立吉野高等学校)建築科卒業後、京都府の古社寺修復業務に携わり、武田五一の建築事務所・木圭社を拠点として活躍し、昭和 6 年(1931)、奈良県技手となり畝傍中学校の設計を担当した。それまでの経歴から和風を得意としたが、同時に鉄筋コンクリートの構造設計もできたとされている。

『改築落成記念』より体育館

施工は同誌に、「第一期工事請負者　市村市松／代理施工　清水組／第二期工事請負者市村市松／代理施工　上田眞次郎／大橋龍太郎」とあり、全工事を通じて市村市松が請負者であることが知られるが、どのような役割を果たしたかは不明で、『「回顧」創立六拾周年記念誌』(昭和 31 年(1956))の沿革概要の昭和 7 年の項に「九月二十日　本校改築第一期工事完成に付本日清水組及県との引継ぎ終了せり」とあることから、少なくとも一期工事については清水組が実際の施工を行ったと考えられる。

北館車寄せ天井中心飾り

『改築落成記念』所収の図面によれば、昭和 8 年の竣工当初の本館は現在とほぼ変わらず、北館、南館間に動力庫(現第三倉庫)を配し、本館西側に講堂を、本館東側には雨天体操場を配し、さらに東側には武道場を配していたことが知られる。また、

当時の写真から正門及び柵もすでに竣工していたことが知られるが、『改築落成記念』所収の写真では中央通路と運動場間の階段及び朝礼台は竣工していない。階段及び朝礼台の建設時期は明らかでないが、『「回顧」創立六拾周年記念誌』所収の体操風景の写真に朝礼台及び階段が写っており、「2600 年」のキャプションから、少なくとも昭和 15 年(1940)には建設されていたと考えられる。

北館玄関から渡り廊下を見る

北館廊下と階段

その後、終戦を経て高等学校となってからは毎年のように増改築が行われ、昭和 29 年には倉庫(現第一・第二倉庫)を新築し、昭和 30 年(1955)には図書館、女子便所、昭和 31 年(1956)には食堂を新築(いずれも現存せず)、昭和 35 年(1960)にプールを建設、昭和 42 年(1967)には、体育館を運動場東端に新築した。また、昭和 44 年(1969)には北館東方に特別教室棟を建設したが、これに伴い昭和 8 年当時に旧寄宿舎を移築した武道場の北側が解体された。昭和 46 年(1971)には昭和 8 年当初の正門を解体して現在のものとしたほか、昭和 51 年(1976)に同窓会館を新築し、昭和 54 年(1979)に弓道場を新築した。昭和 61 年(1986)になると昭和 8 年当初の旧雨天体操場、格技室となっていた旧武道場南側を除却し、小体育館と新南館を建設するとともに現在の第一史料館を建設した。さらに平成元年(1989)には格技場、体育研究室等を新築、平成 8 年(1996)には昭和 8 年当初の講堂を解体し、文化創造館を建設するとともに第二史料館を建設して現在の姿となった。

南館普通教室

南館階段室上部のガラスガラリとグリル

建築の概要

(1) 本館

本館はH型平面を持ち、北館、南館、渡り廊下からなり、北館、南館は鉄筋コンクリート造 3 階建、

渡り廊下は鉄筋コンクリート造 2 階建で北館、南館を繋ぐ。北館東側には鉄筋コンクリート造平屋建の昇降口が付属する。建設年代は『改築落成記念』などの史料から昭和 8 年(1933)であることが明らかである。

北館は、桁行 71.50m、梁間 10.00m、鉄筋コンクリート造 3 階建の主体部と、桁行 14.55m、梁間 10.00m、鉄筋コンクリート造、平屋建の昇降口からなり、陸屋根の四周は本瓦葺の庇付きパラペットとし、北側を正面としてやや西寄りに玄関車寄せを突き出す。玄関奥には階段室を配し、階段室正面側外壁は 3 層を貫いて塔状に造り出し、頂部は方形造、本瓦葺の塔屋として、屋根頂部に相輪を据える。平面は各階とも北側片廊下式で、1 階には校長室、職員室、会議室等の管理部門を配置し、2 階、3 階は普通教室とする。階段は正面玄関奥と主体部東端に配し、中央階段室は踊り場にダストシュートを設け、1 階南面に開口を取って渡り廊下に接続する。主体部東端には昇降口が付属し、小体育館への昇降口とロッカー室とする。建設当初昇降口は南側に建つ雨天体操場への出入口としていたが、現在雨天体操場は解体されている。

南館は北館主体部と同規模で、桁行 71.50m、梁間 10.00m、鉄筋コンクリート造 3 階建、陸屋根四周を本瓦葺の庇付きパラペットとし、塔屋は切妻造、本瓦葺で、妻面を南北側に見せ、南面再頂部に丸窓を設けガラス製のガラリを取付ける。平面は各階とも北側片廊下式で普通教室を配置するが、西端はやや広く取って特別教室とし、1 階を化学教室、2 階を物理教室、3 階を生物教室と自然科学系の教室及びその準備室に用い、1 階化学教室にはドラフトチャンバーを設置する。階段は北館同様東端と渡り廊下の延長に中央階段を配し、中央階段室の 1 階南面は出入口とする。

渡り廊下は、桁行 21.78m、梁間 4.55m、鉄筋コンクリート造 2 階建で、陸屋根の東西辺にパラペットを付け、上部は雁振瓦とする。躯体は壁柱で構成され、その東西に付属施設が配されており、東側 1 階は用務員室、更衣室等、2 階は生徒会室、購買室とする。一方、西側は 1・2 階とも便所とする。

外壁は基材に茶色砂を用いた洗い出し仕上げとし、車寄せ玄関開口部の額縁には凝灰岩を用いる。内部では、床は檜材フローリング仕上げ、壁面は檜材横板張りの腰板を張り、上部はプラスター仕上げとし、階段部は、床・手摺を人造石研ぎ出し仕上げとする。

本館の意匠に付いては『改築落成記念』によると、建築様式を「東洋趣味ヲ加味セル近代式」としており、北館及び南館では、基壇風に目地を切った一階腰壁上方に、縦長窓と盲連子を模した壁飾りを並べ、3 階窓下にコーニスを廻して上方は単純化したピラスターを配置する。屋根はパラペットに庇を付け、塔屋と共に本瓦葺とし、軒裏は板軒風に仕上げる。細部では、北館・南館塔屋最上部窓のグリルや、校長室・会議室飾り暖炉、南館南面 1 階出入口の装飾など各所に唐草文様を用いた装飾が施され、また、校長室内部天井センター装飾、玄関欄間等は幾何学文様を用いた和風の表現がみられる。

後世の改変については、昭和 31 年(1956)に南館屋上の防水工事を行い、昭和 38 年(1963)には渡り廊下西側の便所を建て替え水洗化し、昭和 42 年(1967)には北館屋上防水工事を行っている。昭和 44 年(1969)には再び南館屋上防水工事を行うとともに理科教室の改修を行い、昭和 48 年(1973)には騒音対策のため南館南面の当初スチールサッシをアルミサッシに改めた。また、昭和 51 年(1976)には北館南面窓もアルミサッシに改修し、北館内壁の塗装を行った。昭和 58 年には再び北館、南館と

もに屋上防水工事を行い、平成 2 年(1990)に北館・南館北側および渡り廊下の窓をアルミサッシに改修し、この時点で当初の滑り出しスチールサッシュは失われた。さらに平成 11 年(1999)には南館屋上防水工事、パラペット庇の屋根葺替工事が行われ、続いて北館屋上防水工事、パラペット庇及び塔屋屋根の葺替工事が行われ当初瓦の多くを失った。なお、当初の瓦は南館塔屋にのみ残存している。

校長室奉安庫

北館会議室暖炉グリル

当建物は洋風建築の構成を持ちながら、校舎の上部には仏塔風の塔屋を含む本瓦葺屋根を載せるほか、随所に和風の表現が見られる和洋折衷様式の建物である。建築家岩﨑平太郎の代表作の一つであり、県下に現存する鉄筋コンクリート造校舎としては最古で、校長室に奉安庫が完全な形で残るなど竣工当初の姿を良く残しており貴重である。

第三倉庫（旧動力庫）北西面

(2) 第三倉庫

第三倉庫は木造平家建、桁行 5.45m、梁間 5.45m、切妻造、桟瓦葺の建物で、『改築落成記念』所収の図面から、昭和 8 年(1933)建設であり、竣工当初は「動力庫」としていたことが知られる。当建物は学校全体の受電盤だけでなく、理化学実験用の直流電力の発電装置を備えていたようで、このため南館に配された化学、物理、生物の準備室直近に建設したと考えられる。構造は両妻に出入口を設け、出入口を除いて鉄筋コンクリート製の丈の高い布基礎を配して腰壁とし、土台を据えて木造軸部を建て、架構はトラス組とする。壁は真壁で外部は縦板張りとし、両側面はガラス窓引違いで、上方に滑り出し窓を設ける。出入口は板戸引違とし、北妻では庇を設け、南妻では南館への渡り廊下が接続するが、現在は封鎖されている。木部仕上げは内外ともオイルペンキ塗りとみられる。倉庫への転用時期については、昭和 42 年(1967)に高圧電気工事を行っていることからこの頃とも考えられるが、明らかでない。

当建物は昭和 8 年(1933)の本館竣工時の附属建物で、当初の姿を良く残しており、小品ながらも昭和初期洋風建築の好例である。

以下、後壁付き朝礼台と柵は、この度は登録外だ

が歴史的に貴重な建造物である。

朝礼台と校舎

(3) 後壁付き朝礼台

朝礼台は、間口 2.00m奥行き 1.23mの鉄筋コンクリート造の箱形の台で、中央通路、運動場間の段差に設けた階段を切り込み、本館玄関と軸線を揃えて配しており、朝礼台後方は長さ 16.5m、袖壁奥行き 2.13mの鉄筋コンクリート造の擁壁とする。台の内部は室とし、運動場用具庫であったと推測され、南面に扉を設けていたが、現在は欠失している。また、東西側面には鉄製の階段の取付いた痕跡が残るが今は失われ、北面に後補のコンクリート製の階段が取付く。また、現在は中央通路から 2 段の階段を介してコンクリート製の橋を架け渡しているが、これも仕上げから後補のものであることが知られる。仕上げは本館校舎同様洗い出し仕上げとする。

建設年代については明らかでないが、『「回顧」創立六拾周年記念誌』所収の体操風景の写真に朝礼台及び階段が写っており、「2600 年」のキャプションから、少なくとも昭和 15 年(1940)には建設されていたと考えられ、同誌所収の別の写真では擁壁後方に台を置いており、この写真の前後に建設されたことが知られる。

固定式の朝礼台の遺例については、明治 26 年(1893)開校の郡山中学校(現奈良県立郡山高等学校)、明治 29 年(1896)開校の奈良県尋常中学校五條分校(現奈良県立五條高等学校)、大正 12 年(1923)開校の宇陀中学(現奈良県立大宇陀高等学校)、大正 13 年(1924)開校の奈良県立奈良中学校(現奈良県立奈良高等学校)などをみても例がなく、県下では珍しい。県外では同様の施設が岡山県立岡山工業高等学校に存在するが、年代などの詳細は明らかでない。なお、類似の例としては、旧大井海軍航空隊、旧筑波海軍航空基地、旧土浦海軍航空隊司令部、旧第一鈴鹿海軍航空基地などにコンクリート製の号令台が残されている。

当朝礼台は、昭和前期の固定式朝礼台として希少であり、運動場と中央通路の間の高低差を利用した観覧席を兼ねた階段の中央にあって、運動場の中心を際立たせており、運動場の要として当校の重要な構成要素となっている。

運動場側から見る西側柵
（金属供出の跡が確認される）

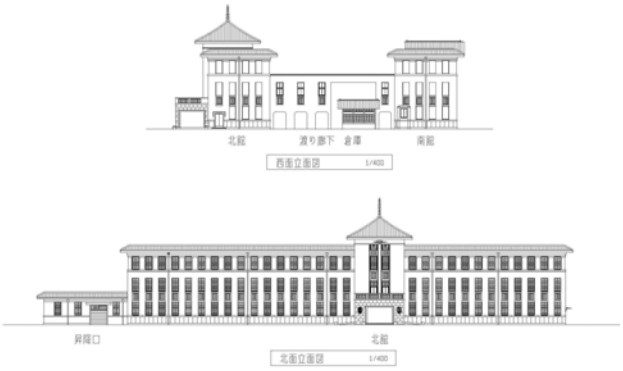
(4) 柵

柵は校地西側境界線沿いに建ち、正門北方は西面 88.29m、北面 1.73m、南方は西面 56.54m、南面 3.27m、延長 144.83m、高さ 1.05mで、鉄筋コンクリート造としている。建設年代は『畝傍百年史』(平成 9 年(1997))所収の写真から昭和 8 年(1933)であることが明らかである。構造は地覆上に 1.58m間隔で台形の柱を建て、上方に欄干を取付ける

簡素なもので、洗い出し仕上げとしている。柱間は各間 2 丁ずつ束を建てるが、旧はアングルを横に 3 段、凸面を正面に向けて取付けていたことが柱側面の痕跡や、当時の写真、図面によって確認できる。学校関係者の話によれば、アングルは戦時下に金属供出されたようである。

正門は惜しくも昭和 46 年(1971)に改築されたが、柱間にアングルを用いた表現は、横連子を模したものとみられ、和風の要素を各所に取り入れた本館校舎と一体として計画されており、当校の重要な構成要素として貴重である。

所見協力　奈良県教育委員会文化財課
所見作成者　建築家　好川忠延、兵庫県ヘリテージマネージャー　稲上文子



立面図

1 階平面図

参考文献及び資料

『改築落成記念』(昭和 8 年　奈良県立畝傍中学校発行)
『「回顧」創立六拾周年記念誌』(昭和 31 年　奈良県立畝傍高等学校発行)
『畝高七十年史』(昭和 42 年　畝高七十年史編纂委員会編　奈良県立畝傍高等学校発行)
『回顧』(昭和 51 年　創立八十周年記念事業部編　奈良県立畝傍高等学校発行)
『回顧』(昭和 61 年　畝高九十周年記念事業委員会編　奈良県立畝傍高等学校発行)
『畝傍百年史』(平成 9 年　創立百周年記念事業委員会百年史編纂委員会編　奈良県立畝傍高等学校発行)
『回顧』(平成 19 年　創立 110 周年記念事業委員会編　奈良県立畝傍高等学校発行)
『総覧日本の建築 6-Ⅱ　奈良・和歌山』(平成 14 年　日本建築学会編)
『あかい奈良　2003 年冬号』(平成 15 年　あかい奈良編集局編、グループ丹発行)
『季刊文教施設 20　2005 秋号』川島智生・奈良県の学校(平成 17 年　文教施設協会発行)